

令和CAST「社会にインパクトある研究」
「社会課題の解決シナリオ作成を目指して」
第2回討論会

2022年2月22日 13:00-15:30 WEB

東北大学大学院工学研究科
先端学術融合工学研究機構(令和CAST)
社会インパクト推進ユニット

趣旨説明と目次

【目的】 様々な社会課題が一層深刻化する一方、それらの解決の糸口がなかなか見えてこない現状において、社会的共通資本としての大学の役割は一層重くなっている。東北大学「社会にインパクトある研究」が発足して数年間が経過し、各プロジェクトにおいて、社会課題の解決の難しさが次第に明らかになってきている。

【第1回討論会】 (令和3年12月4日開催)「社会課題の解決の難しさはどこにあるのか」

6プロジェクト(A4, C2, C4, D5, 里山, G0)から概要説明があり、限られた時間の中で議論も熱心に行われ、参加者からは概ね好評を得たが、討論の時間が十分ではなかった。

【第2回討論会】 (令和4年2月22日WEB開催)「社会課題の解決シナリオ作成を目指して」

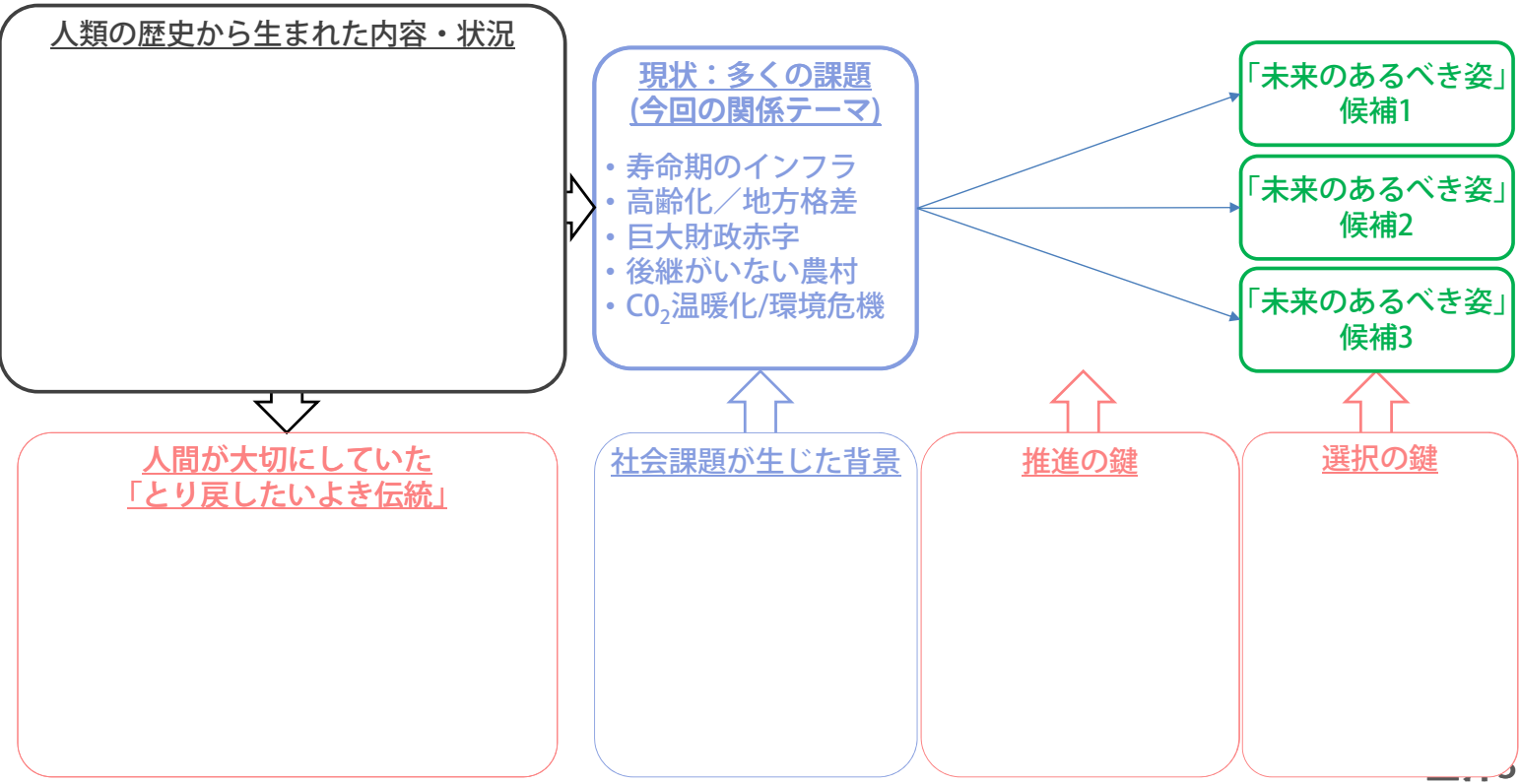
2つのテーマ(C2+里山：久田教授・小倉教授, A0：吉岡教授)に絞り、

- ・ 持続可能で心豊かな社会の「未来のあるべき姿」と、
- ・ 本来人間が大切にし、とり戻したい「よき伝統」、

それらと「現状」の隔たりを埋めるという観点から、「未来のあるべき姿」を選択し、そこへの到達戦略が必要となる。発表のあとに出席者とともに議論を深める。

「社会課題の解決シナリオ作成」を目指して

持続可能で心豊かな社会の「未来のあるべき姿」と、本来人間が大切にし、とり戻したい「よき伝統」、それらと「現状」の隔たりを埋めるという観点から、「未来のあるべき姿」を選択し、そこへの到達戦略が必要となる。



前のページの図の説明

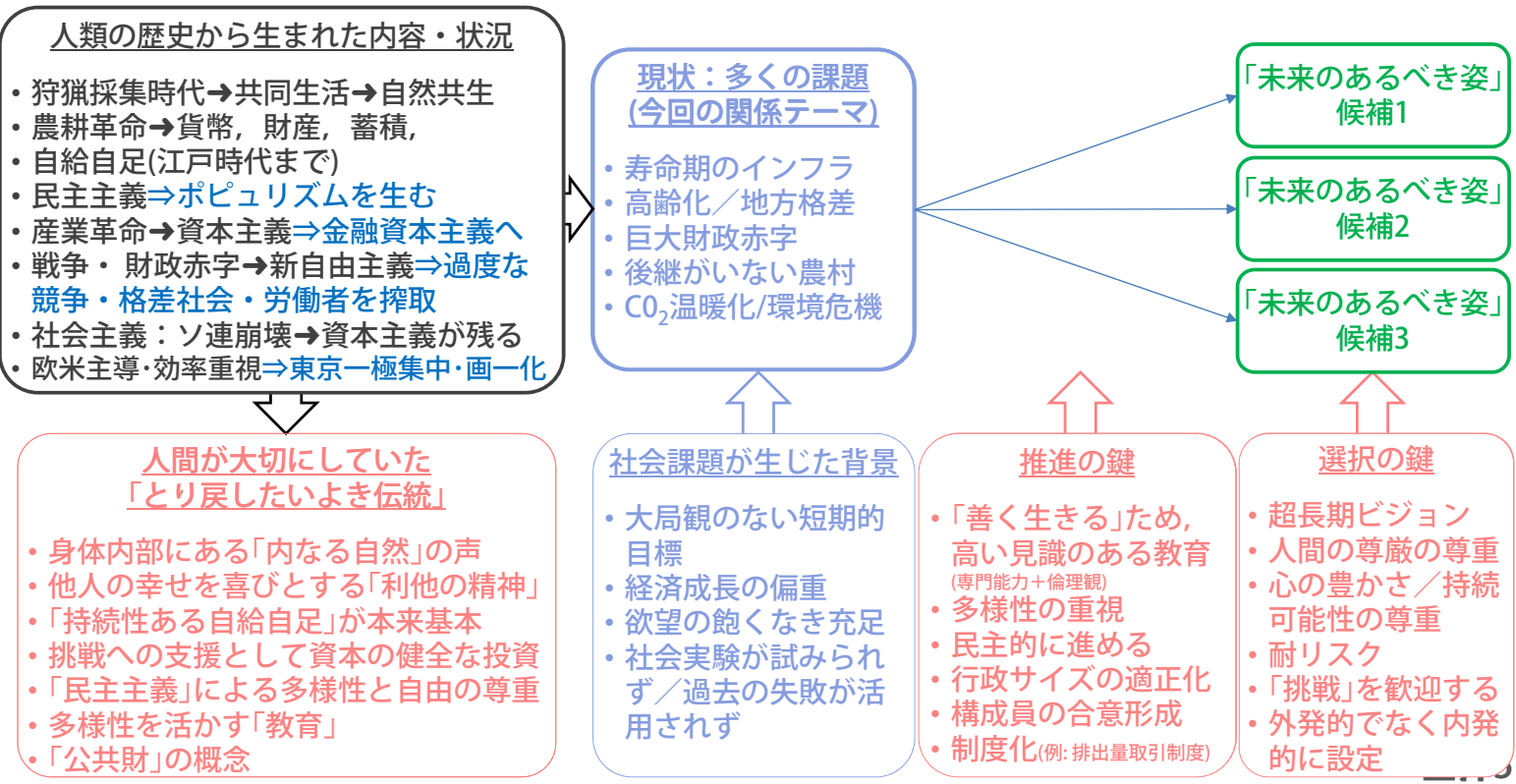
図面の上の2行の趣旨を説明します。右上緑字の「未来のあるべき姿」は幾つか候補があります。それに対し、左下赤字に「人間が大切にしていた『とり戻したいよき伝統』」があります。この中身は後でご説明します。そして中央上の青字の「現状：多くの課題」があります。また、「未来のあるべき姿」を選択する際には、「選択の鍵」があります。そのための到達戦略である「推進の鍵」が必要になります。全体としては、こうした構図になると思います。

本日の討論会では、3名の先生から問題提起があります。中央上の青字の「現状：多くの課題」に記してありますが、久田教授の「寿命期のインフラをどうするか」のためには、地方の格差・高齢化の視点が大事になります。その背景には巨大な財政赤字があります。小倉教授の「里山維持」の話題提供では、その背景に「後継がない農村」があります。吉岡教授の「地球温暖化・環境危機」の問題があります。

この現状を考える上でまず、左上の「人類の歴史から生まれた内容・状況」を考えてみると、狩猟採集時代には人類は共同生活を行い、自然共生をしていた時代がありました。ところが、約1万6000年前に地球が温暖化した後に農耕革命が起こり、貨幣、財産、蓄積ということを人間が発明し、さらに日本では江戸時代までの間、自給自足社会が成り立っていました。一方、西洋では民主主義が起こりました。ところが現在ではポピュリズムに変わり利己的になって、社会にとって正しい方向がなかなか決まらない状況にあります。一方で、同時期に産業革命が起こって資本主義も興ってきました。資本主義についても、今は金融資本主義へ変化し社会にとって正しいとは言えない方向へ進んでいます。さらに人類は大戦争も経験し、特にベトナム戦争が巨大財政赤字を生み米国を初め多くの国は新自由主義に舵を切りました。これによって過度な競争・格差社会、そして労働者が搾取される時代を迎えました。一方、後から生まれた社会主義はソ連崩壊とともに消失して資本主義だけが残り、欧米主導で世界の方向が決められています。日本は、明治維新、戦後復興において、ひたすら効率を重視し東京一極集中、そして教育など様々な側面で画一化が図られてきました。こうしたことが現状の課題の背景にあると考えられています。

「社会課題の解決シナリオ作成」を目指して

持続可能で心豊かな社会の「未来のあるべき姿」と、本来人間が大切にし、とり戻したい「よき伝統」、それらと「現状」の隔たりを埋めるという観点から、「未来のあるべき姿」を選択し、そこへの到達戦略が必要となる。



前のページの図の説明

この現状に対して、これらの「社会課題が生じた背景」が中央下段青色枠にありますが、大局観のない短期的な目標、経済成長への偏重、足るを知らない、すなわち、欲望の飽くなきの充足、過去の失敗が活用されない、あるいは社会実験が試みられないということがあると指摘されています。これらが背景にあり、今日、大きな社会課題の解決の糸口が見出されない現状にあります。

こういう背景から「人間が大切にしていた『とり戻したいよき伝統』」は、まず身体内部に大昔からある「内なる自然」の声であり、これが自然共生と整合すると考えられます。人類は元々自然と一体だったということです。また、人間は共同生活から始まって、本来、他人の幸せを喜びとする利他の精神があったと言われていました。さらに「持続性ある自給自足」が本来は基本となります。ただ、日本は資源が少ないため、現在の状況においては国内の資源だけでは賄い切れないわけです。一方で、人間は何のために生きているかという、「新しいことへの挑戦・刺激」を喜びの一つとしていると言えます。資本主義では、その新しいことへの挑戦に社会が支援するという資本の健全な投資が行われていました。しかし、現在の金融資本主義では挑戦への支援の形が常に明白であるとは言えません。

コロナ禍では、民主主義で政治がなかなか決められない状況ではありますが、では専制政治・権威主義をとればいいのかという、やはり政治家であろうと間違えますので、民主主義による多様性と自由の尊重が大切になります。また、何のために教育するのかの点では、「教育を受けた学生が社会で活躍できるように、豊かな人生を送れるように」という点もありますが、一方で、「将来何が起きるか分からない状況で、それに対応できるように、人それぞれの多様性を活かす教育」が重要となります。ドイツでは電力会社を市民が買い取るが行われておりますが、公共財の概念もやはり大事にする必要があります。

「未来のあるべき姿」は幾つかの候補があり得ますが、その「選択の鍵」には、大局観に対応する「超長期ビジョン」と「人間の尊厳の尊重」が価値判断として最も大切な点と言えます。さらに「心の豊かさ」を尊重し、「持続可能性が備わっているか」という点、「リスクに対する耐性」が問われます。また、人間の尊厳にも関わりますが、若い人の「挑戦を歓迎する」社会であるべきだと思います。最後に、日本の反省ですが、明治維新・終戦後、外国にキャッチアップすることを目指してきましたが、何のために社会をつくるかということへの「内発的な設定」が大事だったということです。ただ諸外国の各々の良い点を輸入するだけでなく、日本流を良く消化することも大切と言えます。

「推進の鍵」には、「善く生きるための教育」が原点になると考えられます。これは教育上の難しい課題です。それは工学研究科でいえば、ひたすら専門能力の修得を目指してきましたが、その専門能力を何に活かすか、いずれの方向に持っていくかという感性や判断力、倫理観や正義感のような人間性が必要だろうと思います。この部分の教育を重視してこなかったという反省があります。さらに、前述の「多様性を重視する教育」、さらにそれらを「民主的に決定し進める」点も大事だと思います。社会が様々な施策を決めるため、適切な行政サイズが大事になってきます。井上ひさしが、吉里吉里国と言って、東北地方の大きさを指したのですが、北欧の各諸国は大体、東北地方の広さ・人口になります。このくらいの行政の大きさの方が構成員の合意形成も容易で様々なことを制度化することができるのでしょ。東北地方と東京での指向が全く異なるため、民主的に進めると過疎地の実情は改善が難しいと言えます。

この図面の上2行の「人間が大切にしてきたものは何か」ということと現状との隔たりを埋めるという観点から「未来のあるべき姿」を選択しように込められた思いは、このような全体図で示すことができます。このような観点を踏まえ、これから3名の先生のお話をお聞きます。